

平成 29 年度姫路市大学発まちづくり研究助成事業

姫路のキリシタン遺跡の調査研究報告

姫路日ノ本短期大学播磨 キリスト教文化研究センター
池田武弘 木原裕 日下部愛子 福西章

【はじめに】

播磨地方にはキリシタン大名であった黒田官兵衛（姫路）、小西行長（室津）、高山右近（明石）、前野長康（三木）の 4 名がいて宣教師の活動を支援していたので 1587 年（天正 15）年に播磨は「キリシタン王国」とまでいわれた。しかし、姫路地域ではキリシタン遺跡が少ないことからキリシタン遺跡の調査やこのような研究は進んでいない。そこで我々はまちづくりの新しい素材を提供することになると考え、姫路のキリシタン遺跡の調査研究をすることにした。

平成 26 年度は黒田官兵衛の研究と遺跡調査を行った。彼の活動は主に宣教師の記録等にたよるしかなかった。これらを見ると、官兵衛はキリシタン大名として、「戦場にも必ず宣教師を同行させ」[1]生涯キリシタンとして信仰を貫いた人物であった。長政も父の影響もあり、キリスト教に好意をよせ、関が原の戦いでは十字架の旗員を掲げて戦っている。これらは現在あまり知られていない人物像である。この研究と並行していくつかの墓地や寺院で発見した遺跡について発表した。さらに、京都・奈良、姫路を訪れた外国人観光客にアンケートを実施した。この結果（回答者 134 名）を見ると、外国人の半数以上は観光目的であり、また、姫路近郊のキリシタン遺跡を訪問したいと回答した人が京都・奈良で 44%（36 名）姫路で 62%（32 名）であった。われわが想像した以上に関心が高い結果であった。

我々はこの結果を見て、キリシタン遺跡の調査研究が新しい歴史を発掘することだけでなく、姫路の観光資源につながることを確信した。

【本年度の調査研究】

本年度は平成 28 年度のキリシタン遺跡調査を継続して調査したところもあるので、その箇所については簡単に前年度の調査に触れ、本年度の調査研究を報告する。

(1) 観音寺の調査

平成 28 年度新在家本町の観音寺について調査した。観音寺は土居家ゆかりの寺である。[2]この観音寺には背面十字架地蔵がある。この背面十字架地蔵（高さ 1 メートル



図 1. 黒田長政の旗印(関が原戦陣図屏風より)福岡市立博物館

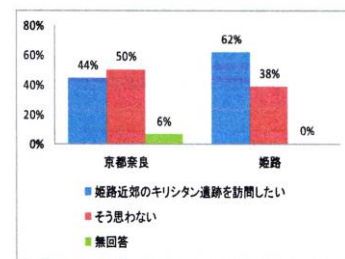


図 2. アンケートグラフ

60センチ)は台石に「享保八年癸卯五月廿一日寂翁宥閑居士孝子佐伯惟秀起立」と刻まれている。山口旒氏の研究[3]により、善防城主赤松則繁の子から8代目の佐伯清右衛門本宜の妹の3回忌に佐伯惟秀によってつくられたものであることがわかっている。そこで本年度は土居家と佐伯氏やキリシタンと関係深い尾上家(長崎で学んだ医者尾上佐仲)、速水家(尾上佐仲の実家、加西喜田墓地に十字架地蔵を建立)、広岡家(姫路藩のキリシタン取り調べで獄死者あり)の関連についても調査した。その



図3. 観音寺背面十字架地蔵



図4. 観音寺「ゼツ仏」墓石

結果いずれも赤松氏の子孫としてつながりがあったことは興味深い。また本年度の調査で観音寺に「南無阿弥ゼツ(β偏に色)仏」と書かれた墓石を新たに発見した。このような字は大漢和辞典をみても出てこない。推測するとキリシタンが「絶」の字を用いたが「糸偏の絶」を用いるとすぐにわかるので、「南無阿弥陀仏」と見間違えするような「β偏に色」としたのかもしれない。この意味については「仏を絶つ」と解釈できるがとれるが、当時イエスキリストを「ゼスキリスト」と表記していたので、「ゼツ」は「イエス」を表す意味で使われたと考える研究者もいる。この墓石は明治になってからつくられたものであるが、台石に「當山○○上人」と刻まれているのは大変珍しい。

(2) 山田町の調査

舟津町ではすでに共同墓地にある背面十字架地蔵と葉常寺にはカラーで装飾された背面十字架地蔵があることが知られているが、山田町について調査することになったのは、「吉野文書」があったからである。これにはキリシタンに関する記載が2か所あり、そのうちの一つは「文政六・・・神東郡南山田村 加西郡岸村神西郡常吉村 其外所々切支丹宗ニころび候風分にて御地頭御吟味中ニ御座候」[4]記録があった。当初この文章にある「神西郡常吉村」は現在の香寺町恒屋ではないかと思い、調査したが何もわからなかった。さらに調査を進めた結果山田町牧野の光景寺そばの墓地でキリシタンのものと思われる「同會」に十字架を刻んだ墓石等を発見することができた。これがキリシタンの墓石とは断定できないので、確認のためA家B家の過去帳を調査した。B家はわからなかったがA家の過去帳には普通ではつけられないような「秋月道・・・信士」とか「天岩道迷・・・信士」というような戒名を発見した。この調査により、牧野にキリシタンがいたことが判明した。本年度牧野についても再調査した。「ひめじ明治のかたりべ集(上巻)」[5]に村や光景



図5. 「同會」墓石

寺の盛衰が記されていた。要旨は江戸時代初期まで牧野は温泉が湧き、金や銀が採掘でき、大変賑わっていた村で、このころに光景寺が建立された。ところが温泉もでなくなり、人が寄りつかなくなり、住職も離れ、光景寺は村人も放置したままで荒れ果てたとある。そして慶応二年(1866)山津波が押し寄せ田畑が流され、村人たちが光景寺の観音様を粗末にしたあたりだと叫び、寺を再建し、光景寺のお裏山に百羅漢をお祀りした。ということであった。現在もこの言い伝えのとおり、多くの地藏菩薩を裏山で見ることができる。しかし、最初に設置してある、地藏菩薩は他のものと明らかに異なっていた。この地藏菩薩のみ背面に彫刻がされている。この地藏菩薩の背面には十字架の縦棒が通っているように見える。背面十字架地藏は享保年間から造立されるようになり、背面の十字架は時代がたつにつれ、縦の部分が短くなっている。それを考えると、享保時代に造立されたものと思えるが、他の地域の背面十字架地藏と比較してみる必要がある。



図 5. 光景寺裏山の地藏

(3) 豊富町の調査

昨年度豊富町神谷(こだに)地区の細野の墓地を調査した。この地区は加西の大柳町と接しており、中世にから姫路から加西への道として知られていた地域である。ここには田圃にある墓地と、山裾の墓地がある。山裾の墓地は土葬の上に石を載せただけの墓もあり、江戸時代初期には存在していたと思われる。この2か所の墓地に背面十字架地藏があったので、再調査したが、風化が著しくすすんでおり、いつ頃造立されたのかは判別できなかった。しかし、この地域のキリシタンの墓石は姫路の他の地域より早くから存在していた可能性がある。



図 6. 背面十字架地藏

(4) 太尾地区の調査

太尾は江戸時代の絵図を見ると主要道路の一つであった。この村はキリシタンとして姫路藩に捕らえられ、獄死者が出た広岡家と関係のある地域でもある。そこで本年度3回にわたって調査を行った。この墓地を調査したところ、この墓地でもキリシタンの者とみられる墓石を発見することができた。「○」「鉄」の彫られた墓石や特に今まで見たものと違い、「同會」に十字架を刻んだ鮮明な墓石をみることができた。誰がみても「同會」に十字架が刻まれているのが



図 7. 「鐵」墓石
図 8. 「同會」に十を重ねた墓石

まれているのが分かる墓石であった。

(5) 八徳山の墓地調査

本年度は慶長時代から江戸中期まで、香寺町相坂から八徳山の西のふもとを通り、矢田部から久畑へ行く道が主要な道があったことがわかったので、八徳山も調査することにした。八徳山八葉寺は天台宗の寺院で、江戸時代は五院十三房寺院を有した格式のある寺院である。調査をしてみると、地元から預かっている無縁墓の中で「同



會」に十字架を刻んだ鮮明な墓石を発見

図 9. 「同會」に十墓石

図 10. 「同會」に十墓石

した。そしてここでも「南無阿弥ゼツ仏」の墓石を見ることができた。さらに無縁墓の中に今まで姫路市内では見たこともなかった地蔵を発見した。通常なぜ肩の地蔵であるが、長年研究している福西章研究員が肩の角ばった地蔵菩薩が4体あることを発見した。これはキリシタンの地蔵といわれているものである。そしてそ



図 11. 普通の地蔵菩薩

の中の一体は錫杖（しゃくじょう）と呼ばれる遊行僧が携帯する杖の紋様が異なっていた。キリスト教の父（神）と子（イエス・キリスト）と聖霊の「三位一体」をあらわす錫杖を持った地蔵であった。

地元の村から預かっているということは香寺町にもキリシタンが相当数いたことになる。

以上の調査により姫路市内にはキリシタン遺跡はほとんど見当たらないと思われていたが、予想外に多くの遺跡を発見できた。

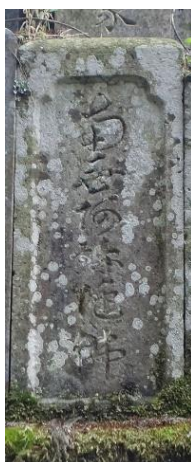


図 12. 左「南無阿弥ゼツ仏」の墓石



図 13. 中「いかり肩」地蔵



図 14. 右上「いかり肩」で三位一体をあらわす錫杖をもった地蔵

<引用資料> [1]「黒田官兵衛」本山一城著宮帯出版 [2]「因達里ふるさと新在家」新在家6町自治会 [3]「豊後佐伯氏と播磨のキリシタン紋様」山口旻著

[4]「近世史料加西吉野文書」加西市教育委員会 1980（欠落部分を追加された部分より）

[5]「ひめじ明治のかたりべ集」（上巻）姫路市老人のための明るいまち推進協議会